

目次

「高等教育： 変革のエンジンか大勢への支持か 一見解の要約」

ピーター・ヴァン・ティンブルグ

「認定と質の保証 ー スイス・モデル」

アンドレア・シェンカー＝ウィキ

「三者間任務の将来： 大学、医学部、保健システムをつなぐ関係の再検討」

トム・スミス、シリア・ウィットチャーチ

「大学指導者か企業経営者か： オーストラリア高等教育機関の学長と学部長、1977 年から
1997 年」

グラント・ハーマン

「チェコ共和国における大学の変革： ピルゼンの西ボヘミア大学の経験」

ジョセフ・ローゼンブルグ

「分裂したシステムの改革： ボスニア・ヘルツェゴビナの高等教育」

ポール・テンプル

書評

デビッド・パルFREイマン

摘要

「高等教育： 変革のエンジンか大勢への支持か — 見解の要約」¹

ピーター・ヴァン・ティルブルグ
ティルブルグ大学、オランダ

この論文の目的は、高等教育と社会的発展との相互作用を評価することである。高等教育は社会的変化を引き起こすのか、あるいはグローバルな要求に順応するのかが問われている。答えは両方である。しかしながら、高等教育の影響を計測するのは容易ではない。それは、大学、政府、民間部門、そして市民社会といった関係者による干渉に左右されるからである。これらの干渉は、互いに矛盾する効果をもつことがある。生徒の要望に基づいた教育を行うと、社会が必要としない高度に熟練した人々が養成され得る。政府、民間部門、あるいは市民社会の社会的要求は対立することもある。このような対立する要求は、高等教育機関がグローバルなネットワークの中でその役割を果たすときに、とりわけ顕著となりうる。

「認定と質の保証 — スイス・モデル」

アンドレア・シェンカー・ウィキ
チューリッヒ大学、スイス

自治の拡大、国際コースを提供する新しい教育機関の増加、またボローニャ宣言の実施が同時に起きたことにより、スイスでは他のヨーロッパ諸国と同様に、大学における認定と質の保証の重要性が新たな意味を持ち始めた。こうした進展を考慮して、スイス政府と大学管轄州は、認定の問題だけでなく、大学における質の保証や向上についても責任を持つ、認定および質保証委員会を設立することに合意した。

高等教育分野の質を厳密に審査する機関の設立をめぐる論議は、スイス国内に論争を引き起こした。しかし、大学と政治的組織（政府と行政機関）間の数ヶ月にわたる集中的な論議の結果、相違が見られた見解は最終的に、全関係者から広く支持されるモデルに収斂した。このモデルは次の利点を持つ。それは最低基準を満たしているかとの認定の問題だけではなく、大学における持続可能な質の向上を約束する質保証メカニズムの実施に焦点を当てていること、また、プログラムだけでなく高等教育機関も認定の対象としていることである。

「三者間任務の将来：
大学、医学部、保健システムをつなぐ関係の再検討」¹¹

トム・スミス

ケンブリッジ大学、英国

シリア・ウィットチャーチ

ロンドン大学キングス・カレッジ、英国

国内状況の違いにかかわらず、大学－臨床パートナーはどの国でも同様の目的をもつ。それは、世界レベルの研究、教育、医療サービスを提供することであり、そしてそこには同様の緊張がある。保健－高等教育パートナーは、二つの主要な矛盾に直面している。両者は相互依存している（それぞれの任務を果たすためにお互いを必要とする）と同時に、独立している（異なる優先順位に従って運営される）のである。パートナーはまた、二人の主人（保健と教育）からの要求のバランスをとろうと努めるが、その優先順位を一致させるのは困難である。臨床、教育、研究の世界的な変化によって、パートナーシップを組織する伝統的手法はあらゆる点で課題に直面している。その組織形態に対する圧力にもかかわらず、三者間任務は依然として極めて重要である。任務の遂行方法については再検討する必要がある。

証拠に基づく診療とサービスの革新を導入し、研究を診療に反映させ、増大する知識基盤を管理し、作業の新たな形態を開発するためには、三者間アプローチが必要である。パートナーシップは、各構成要素を統合することにより単に各要素を寄せ集めた場合より大きい効果を生み出すことを意味する各任務の間のシナジー作用に必ずしも焦点をあてるものではない。

本報告書は、サービス、研究、教育間の関係の現在および将来に関する、保健ならびに大学部門と接する組織のリーダー達との論議をまとめたもので、三者間任務を管理運営する人々の課題や、こうした課題へのアプローチについての提案を概説している。

「大学指導者か、企業経営者か：
オーストラリア高等教育の学部長、1977年から1997年」

グラント・ハーマン

ニューイングランド大学、オーストラリア

本論文は、オーストラリアの高等教育機関の学部長の役割と個人的特質について 1977年から1997年の20年間の変化を検証するものである。1977年から1997年に、学部長が優れた資質と見事な研究成果を持つ大学人であり続けた一方で、学部長とその他の大学教員との間の研究実績面のギャップは縮小したが、学部長と教授陣とのギャップは広がった。1997年に学部長が教授あるいは助教授の役職を有する確率は、1977年よりも小さくなっている。1997年から1997

年の間における学部長と他の大学教員の労働パターンは、両者の一週間あたりの労働時間が共に増加したことを除くと、非常に安定していた。しかし、運営や委員会の仕事に対する学部長および他の大学教員の関心は、1977年から1997年の間に大幅に低下した。

「チェコ共和国における大学の変革： ピルゼンの西ボヘミア大学の経験」

ジョセフ・ローゼンブルグ
西ボヘミア大学、チェコ共和国

本論文は、1990年代初頭におけるチェコの大学の立場を概説し、特定の事項に焦点をあてるものである。チェコ社会の進展につれて、大学教員は新たな課題に直面した。様々な国際プログラムへの参加と、ヨーロッパや世界の高等教育のトレンドに関する情報を得る機会は、極めて重要であった。これらの面での支援が、国内法の変化と共に、チェコの高等教育の変革プロセスを加速させてきた。

本論文の主眼は、ピルゼンの西ボヘミア大学（UWB）が、その開発プランに示されるように、どのように外部の状況に対応してきたかを要約することにある。本論文は、UWBを中規模大学の一例として用い、同大学の開発プランにつながった同大学の潜在的可能性及びその外部環境を分析するプロセスを解説する。同プランの実施における主要目標は、スタッフ（教員と非教員の両者）の態度を変えることである。本論文では、これまでの成果や克服すべき障害が示されている。

「分裂したシステムの改革：ボスニア・ヘルツェゴビナの高等教育」

ポール・テンプル
大学高等教育管理コンサルタント、英国

ボスニア・ヘルツェゴビナの1992年から1995年の戦争は、各学部がかなりの学問的、財政的独立性を持っており、既に分裂していた大学機構に深い民族間の亀裂を生じさせた。学部は、フンボルト理念の伝統にのっとり、半自治権をもつ「教授職」と研究所によって構成されていた。そうした組織は、運営部門の地位を向上させたユーゴスラビア独特の「自主管理」政策によって、共産主義時代にさらなる自治権を獲得した。高等教育に関する効果的な国レベルの計画や指揮が欠如する現在のボスニア・ヘルツェゴビナでは、機関レベルでのこうした分裂はさらに深まっている。

国際機関による戦争後の改革の努力は、このような分裂した機構の問題の一部にも取り組んで

きた。しかし、こうした取り組みにおいては、ボスニア・ヘルツェゴビナの大学が基盤を置く学究的理念と、経営改革のモデルとなることが多い伝統的アングロ・サクソン理念との違いが十分に考慮されていない。長期にわたり確立している大学の組織的枠組みへの理解を深めることで、援助プロジェクトが大学の運営管理面の有効性向上に役立つとともに、多方面の分裂によるダメージの一部を取り消すことが可能になるだろう。

ⁱ 本論文は、オランダ・ティルブルグ大学発達研究所（IVO）が2001年3月22日に開催した国際会議「高等教育とその社会政治学的背景」に提出された論文の改訂版である。

ⁱⁱ 高等教育機関の管理運営に関するOECDプログラム（IMHE）は、2001年8月、大学と保健システムの接点における管理運営の経験を発表する会議を主催した。15カ国から保健当局、医大付属病院、医学部教員、大学機関を代表する参加者が、パリのOECD本部に会した。保健と高等教育部門の多数の上級管理職員が、相互に依存する彼らの任務を管理運営する複雑さについて論議したのは、われわれの知る限りではこれが初めてである。